

## 「V + 着」と〈V + テイル〉の対照研究 (六)

時 衛国

外国語教育講座

### A Contrastive Study of “Verb + Zhe” and “Verb + Teiru” (VI)

Weiguo SHI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要約

本研究は中国語の「着」と日本語の〈テイル〉の意味機能と文法的特徴について、これまでの先行研究を踏まえながら考察し、両者の共通点と相違点を究明することとする。中国語の「着」と日本語の〈テイル〉は、存在表現において、「站/立つ」「坐/座る」などの動詞に接続する場合は静的状態の持続、「飞/飛ぶ」「跑/走る」などの動詞に接続する場合は動的状态の持続を描写できるという点では大体共通している。しかし、両語は、存在場所を表わす語句が比較的自由に移動することが許容されるかどうか、また、移動された場合はその状態を描写することができるかどうかという点では大きく異なっている。

「着」は存在表現において、動的状态と静的状態のいずれも表現することができる。しかし、場所を表わす語句が文頭に来てない場合は、その状態の持続を描写することができない。また、「下着雨」などといった動詞フレーズは、存在表現への依存度が高く、文法的には独立性に欠けている。〈テイル〉は存在表現において、動的状态と静的状態の持続のいずれにも使用することができるが、存在表現の文型には依存することがなく、助詞の機能により、文中における位置の移動への許容度も高いため、典型的な存在表現のために束縛されることはあまりない。そして文法上の独立性も認められ、空間範囲を表わす語句がなくても、文法的機能を果たすことができる。

キーワード：存在表現・動的状态・静的状態・持続・描写

#### 1. はじめに

中国語には「存在場所 + 動詞(V) + 着 + 存在対象」という構造があり、一方、日本語には「存在場所 + 存在主体 + 動詞(V) + テイル」という構造がある。両言語は語順<sup>1)</sup>こそ異なれ、いずれもどこかに人間や物が存在することを表わす言語表現の構造を持っている。本研究では、この言語表現の構造を存在表現と呼ぶことにする(以下同じ)。両言語は文法的にはさまざまな違いがあるが、存在表現の構文の特徴としての場所語がセンテンスの頭に来るという点では全く同じである。そして、「着」と〈テイル〉<sup>2)</sup>はいずれも存在表現に用いられ、存在状態を描写することができるという点においても共通している。たとえば、

- (1) 门口站着学生。(出入口のところに学生が立っている)<sup>3)</sup>

- (2) 出入口のところに学生が立っている。

- (3) \*学生站着门口。(「出入口のところに学生が立っている」の意)

- (4) 学生出入口のところに立っている。

(1)(2)のように存在表現における静的状態を表現することができるという点では、両語は共通しているが、(3)のように動作主体としての静的状態を表現することができないという点では、「着」は〈テイル〉と違っている。

「着」と〈テイル〉は、存在表現においてどのように用いられ、どのような共通点と相違点を持っているのか、そして、文法的にはどのような特徴を持っているのか。両語の意味機能を明らかにするために、対照研究の角度から考察する必要がある。そこで、本研究は、存在表現における「着」と〈テイル〉の意味機能と文法的特徴について、これまでの先行研究を踏まえながら考

察し、両者の共通点と相違点を究明することとする。

## 2. 先行研究

「着」については、李臨定(1985)(1986)、陈平(1988)、徐丹(1992)、戴耀晶(1994)(1997)、菅谷有子(1996)、刘一之(2001)、吴卸耀(2006)、王学群(2007)、高橋弥守彦(2007)、丸尾誠(2007)、张黎(2012)、三宅登之(2013)などの研究がある<sup>4)</sup>。特に、存在を表わす「場所語+V+着+目的語」という構造については、各氏の研究の蓄積がある<sup>5)</sup>。しかし、これまでの先行研究では、存在を表わす「場所語+V+着+目的語」という構造と能動を表わす「主語+場所語+V+着+目的語」という表現の意味の連続性についてはあまり言及されていない<sup>6)</sup>。また、吕叔湘(1984)では中国語の存在表現について、A「屋子里有人(部屋の中に誰がいる)」とB「门口站着一位红军战士(入口のところに一人の赤軍の兵士が立っている)」とC「墙上挂着一幅世界地图(壁に世界の地図が一枚掛かっている)」の三種類に分類し、説明を行なっている。この研究は存在表現を理解するのに役立つものであるが、存在表現に伴う文法的な制限についても説明する必要がある。

〈テイル〉については奥田靖雄(1977)、寺村秀夫(1984)、仁田義雄(1982)、工藤真由美(1995)、中島孝幸(1999)などの研究がある。これらの研究は主として「主語+目的語+V+テイル」という能動表現について考察しており、参考になるものであるが、「場所語+対象語+V+受動形+テイル」と「場所語+対象語+V+テアル」という構造についてはあまり述べられていない。「場所語+対象語+V+テアル」という構造については、寺村秀夫(1984)、益岡隆志(1987)、杉村泰(1996)、原沢伊都夫(2002)、飯嶋美智子(2004)、李京保(2007)、吉川妙子(2012)などの研究がある。寺村秀夫(1984)はこの文型について、眼前の状態を描写する文型と現在の状況を述べる文型に分けて説明している。運動と存在を表わす表現形式は多種多様であり、各表現形式の意味機能を究明するには、相互の関連性を視野に入れて考察することが重要なのではないかと思われる。ところが、従来の研究では、「主語+目的語+V+テイル」と「場所語+対象語+V+受動形+テイル」と「場所語+対象語+V+テアル」との三種類の文型について、相互の関連性・意味の連続性・表現の論理性などの視点から考察すべきなのではないかと考える。

## 3. 分析

李臨定(1986)(1997)は、中国語の「場所語+V+着+目的語」という存在表現の文型を八種類に分類した上で、いずれも「着」と共起し、動的状態を表わすもの(「飄(漂う)」「飞(飛ぶ)」「走(歩く)」「跑(走る)」など)は、

情景描写に用いられると述べている。宋玉柱(1988)は存在文(本研究でいう存在表現に相当、以下同じ)について、動態存在文と静態存在文に分類し、動態存在文では「着」は「了」に置き換えることができないのに対し、静態存在文では「着」は「了」に置き換えることができると指摘している。

一方、吴卸耀(2006)は、「路边坐着一个人(道端に一人の人が座っている)」を静態の持続、「路上走着一个人(一人の人が道を歩いている)」を動態の持続としている。三氏の分類においては、動的状態を表わす存在表現が、それぞれ一つのグループとして分類されているという点については評価できるが、ただ、三氏の研究における動態と静態という基準の分類は判然としないため、混乱を生じやすいという問題がある。

また、陈平(1988)では「坐在台上(演壇上に座る)」を動的状態、「在台上坐着(演壇上に座っている)」を静的状態としている。実際には、「挂(掛ける)」「贴(貼る)」などの動詞は能動表現において「着」を伴った場合は、動的状態の持続を表わすということができるとは、存在表現では、場所語が文の頭に来ることもあり、「飄(漂う)」「飞(飛ぶ)」「走(歩く)」「跑(走る)」などは状態的な動態を表わすので、「云飘着(雲が漂っている)」「他跑着(彼は走っている)」という能動表現とは違っている。「飄(漂う)」「飞(飛ぶ)」「走(歩く)」「跑(走る)」などは能動表現に用いられると、動作・行為の進行中の動的状態を表わすことになるが、存在表現に用いられると、ある場所に存在するという動作・行為が強調されるという前提になっているため、存在表現における動的状態(動態)を表わすというべきであろう。それに対し、「坐(座る)」「睡(寝る)」などの動詞は存在表現に用いられる場合、存在表現における静的状態(静態)を表わすと言える。この点については従来の研究ではあまり述べられていない。

しかし、「(主語+)場所語+V+着+目的語」という能動表現と比べれば、「天上飘着云(空には雲が漂っている)」「路上跑着车(路上には車が走っている)」などのような存在表現は、動作主や話者による制御不可能な動的状態を表わしているため、動作主や話者による制御可能な動的状態と性質が違っているという点については指摘すべきである。ところが、存在表現の主な働きは、もともと静的状態(李臨定1986)を表わすことになるため、存在表現における動的状態は能動表現における動的状態とも、存在表現における静的状態とも違っている。この点については明らかにしなくてはならないと考えている。

日本語では、存在表現についてはあまり記述されていない。これは日本語は膠着語として助詞や助動詞によって文法関係を表わすため、助詞や助動詞の役割が重要であり、語順はあまり重要ではないからであろう。たとえば、「出入口のところに学生が立ってい

る」における「立っている」という述語は文末に来ることが規定されているが、「出入口のところ」という修飾語と「学生」という主語がそれぞれ助詞の〈ニ〉と〈ガ〉によって表現されているため、その語順が逆さまになっても成立する。この点は後述のように、日本語の文法的特徴の一つであり、文の成分は語順に依存するのではなく、助詞などによって機能することになる。しかし、「場所語(ニ)+主体(ガ)+V+テイル」という構造を取る場合、特に「場所語+ニハ」の場合は、存在場所が強調されることになり、存在表現として考えられるのではないかと思われる。

両言語の存在表現の構文は、それぞれ「存在場所+V+着+存在対象」と「存在場所+V(自動詞)+テイル」である。中国語は「①存在場所+②存在状態(V+着)+③存在対象」からなっており、「門口站着学生」を例に分析すると、「門口」は①にあたり、存在の場所を表わす。そして「站着」は②の存在状態(V+着)に相当し、状態の持続を表わすことになる。「学生」は③対象語として存在の対象を表わす。一方、日本語は〈①存在場所+②存在主体+③存在状態(V+テイル)〉から構成されている。「出入口のところに」という文節は①存在場所として、主格に立つ主体が存在する場所を表わすことになる。「学生ガ」が②主格(ガ)を取ることで、存在状態の主体を表わす。そして、「立っている」は③存在状態(V+テイル)として状態の持続を表わす。この構文の意味はどこに誰(何)がどのように存在しているかということを表わすという点では、中国語と日本語は全く共通している。

「①存在場所+②存在状態(V+着)+存在対象」と「①存在場所+②存在主体+存在状態(V+テイル)」という構造に用いることのできる動詞は数多くあるが、本研究では3.1.において静的状態を表わす動詞を取り上げ、存在表現における静的状態について考察し、3.2.において動的状態を表わす動詞を取り上げて、存在表現における動的状態について考察する。

### 3.1. 存在表現における静的状態

中国語では静的状態を表わす場合、「場所語+V+着+対象語」「場所語+V(自動詞)+テイル」などの文型に用いられる動詞は、不及物動詞(自動詞に相当)が多数を占め、少数でありながら及物動詞(他動詞に相当)も見られる。たとえば、「站/立つ」「坐/座る」「立/立つ」「睡/眠る」「躺/寝る」「住/住む」「蹲/しゃがむ」「跪/跪く」「趴/腹ばいになる」「騎/またがって乗る」「跟/付く」「围/囲む」「守/接近する」「藏/貯蔵する」などが挙げられる。「存在場所+V+着+存在対象」と「存在場所+存在主体+V(自動詞)+テイル」における存在主体は、有情物が多いことが特徴として考えられる。この点は3.2で取り上げる「存在場所+V+着+存在対象」「存在場所+存在主体+V(他動詞)+テイル」にお

ける対象語の多くが無情物であるのと異なっている。「着」と〈テイル〉には共通点があれば、相違点もある。たとえば、

- (5) 門口站着学生。(出入口のところに学生が座っている)〈=(1)〉
- (6) 出入口のところに学生が立っている。〈=(2)〉
- (7) 台上坐着主席团。(演壇上には主席団のメンバーが着席している)
- (8) 演壇上には主席団のメンバーが座っている。

「站/立つ」「坐/座る」のように静的状態の持続を描写することができるという点では、「着」と〈テイル〉は大体共通している。(5)(6)では出入口のところに学生が立った状態で存在することを表わすが、(7)(8)では演壇上に主席団のメンバーが着席の状態で存在することを表わす。中国の構文はいずれも「①存在場所+②存在状態(V+着)+③存在対象」であり、日本語の構文は「①存在場所+②存在主体+③存在状態(V+テイル)」の順であり、何れもある場所に有情物が存在しているということから、静的状態の存在表現としては対応していると考えられる。

この種類の構文の特徴は、能動表現に置き換えることができるという点である。たとえば、

- (9) 学生在门口站着。(学生が出入口のところに立っている)
- (10) 学生が出入口のところに立っている。
- (11) 主席团在台上坐着。(主席団のメンバーが演壇上に着席している)
- (12) 主席団のメンバーが演壇上に座っている。

中国語は孤立語として語順によって文法的関係を表わすということはよく知られているが、場所の来る位置によっては文法的意味が異なってくる。

中国語では「③存在主体+①存在場所+②存在状態(V+着)」という能動表現の文型に置き換えられ、「①存在場所+②存在状態(V+着)+③存在対象」における〈③存在対象〉は、もとは受動表現の主語として存在するわけであるが、ここでは能動表現の主語として用いられている。能動表現と存在表現の最も本質的に違う特徴は、能動表現の場合は、有情物が文の頭に来て動作主として働くのに対し、存在表現の場合は、有情物が動詞述語の後に受動表現の主語として用いられるという点である。そして、能動表現の場合は、動作主(有情物)がどこに、どのように存在するかという事象を真正面から捉え、その有情物の存在のあり方を問題としている。この場合は(9)(11)のように介詞「在(に)」<sup>7)</sup>を、「门口(出入口)」「台上(演壇上)」という場所を表わす語の前に置き、存在の場所を明確に示さな

ればならない。介詞「在(に)」が用いられなければ、「??学生门口站着(「学生が出入り口のところに立っている」の意)」「??主席团台上坐着(「主席団のメンバーが演壇上に着席している」の意)」のように非文となる。それに対し、存在表現の場合は、どこに誰がどのように存在するかという事象を表わし、存在の場所を表わす語句を文の頭に置いてその存在の場所を明示し、その場所に受動表現の主語が存在することを強調することになる。しかし、能動表現の場合にも存在表現の場合にも「着」<sup>8)</sup>は存在の状態を描写するという点では共通している。

房玉清(1992)では存在表現について「有」と「是」はいずれも存在を表わすため、存在表現における動詞的フレーズは「有」或いは「是」に置き換えることができる。そして、置き換えになった場合、その意味が基本的には同じだと述べられている(同P 326)。また、この点については吳卸耀(2006)でも言及している。ところが、「有」或いは「是」に置き換えられると、存在の意味を表わすことはできるが、しかし、その状態を描写することができなくなる。たとえば、「门口站着学生(出入り口のところに学生が立っている)」「门口有学生(出入り口のところに学生がいる)」「门口是学生(出入り口のところに学生がいる)」のようになると、出入り口のところに学生が存在することを表わすことができるが、どのような状態で存在しているのか、その状態を描写することができず、ただ抽象的に存在することを表わすだけに止まっている。

日本語では、「①存在場所+②存在主体+③存在状態(V+テイル)」という文型は、「②存在主体+①場所語+③存在状態(V+テイル)」という文型に置き換えることができる。二者はいずれも存在表現の文型であるが、①場所語と②主格の置き換えにより、異なった存在表現を構成することができる。「①存在場所+②存在主体+③存在状態(V+テイル)」という文型の場合は、場所語が文の頭に来るので、勿論存在場所を強調することになる。一方、「②存在主体+①存在場所+③存在状態(V+テイル)」という文型の場合は、能動表現として動作主がどこかに存在していることを表わす。〈テイル〉は存在表現においても能動表現においても存在の状態を描写することができるという点では全く共通しているし、また、中国語の「着」とほぼ同じである。

ところが、日本語は前述の通り、膠着語として文法的関係を助詞などによって表わすという特色がある。(6)(8)のように場所語が文の頭に来ても、状態の主語が助詞によって規定されているので、普通の能動表現として主体の能動的状態を示していると言える。この点は中国語と大きく違っている点である。ただし、存在の場所を強調するときには、「出入り口のところに学生が立っている」「演壇上には主席団のメンバーが座っている」のように、係助詞を付けることによって、

存在の場所を強く強調することができる。この場合は中国語の存在表現に対応していると考えられる。一方、主体が文の頭に来る時、「??学生が出入り口のところに立っている」「??主席団のメンバーが演壇上には座っている」のように、係助詞を付けると、不自然な感じを受けてしまう。この点では従来の研究ではあまり指摘されていない。言い換えれば、「出入り口のところに学生が立っている」「演壇上に主席団のメンバーが座っている」という表現の場合は、典型的な存在表現とは言い切れない側面がある。というのは「学生が出入り口のところに立っている」「主席団のメンバーが演壇上に座っている」という表現にも置き換えることができるので、助詞による位置の置き換えが認められるからである。そして、「出入り口のところに学生が立っている」「演壇上には主席団のメンバーが座っている」という表現になると、「存在場所+ニハ」という構造によって、存在表現における存在場所が端的に強調できるようになるため、典型的な存在表現になると考えられる。前述の通り、この場合は、語順の自由な移動が認められにくいものと思われる。

能動表現の場合は、(13)(16)のように、「②主体+③存在状態(V+着)+①存在場所」という文型を取ると、「着」は用いることができなくなる。「着」は「学生站着(学生が立っている)」「主席团坐着(主席団のメンバーが座っている)」のように状態の描写には用いることができるが、しかし、場所語が述語動詞の後に来る場合、「着」は場所語を支配するだけの意味機能が付与されていないため、場所語とは共起することができない。この場合は「着」のかわりに、介詞「在(ニ)」を用いることになる。

- (13) \*学生站着门口。(「学生は出入り口のところに立っている」の意)
- (14) 学生站在门口。(学生は出入り口のところに立っている)
- (15) 学生は出入り口のところに立っている。
- (16) \*主席团坐着台上。(「主席団のメンバーは演壇上に着席している」の意)
- (17) 主席团坐在台上。(主席団のメンバーは演壇上に着席している)
- (18) 主席団のメンバーは演壇上に座っている。

中国語は前述の通り、SVOタイプの言語として語順が守られることになる。ところが、「站」「坐」のような動詞は他動詞ではなく、存在の状態を表す不及物動詞(自動詞に相当)であるため、目的語を取ることができない。ただし、「学生站着(学生が立っている)」「主席团坐着(主席団のメンバーは(演壇上に)着席している)」のように、目的語を取らない場合は表現として成立するが、存在の場所を明示することができない。そして、存

在の場所を明示する場合は、存在の場所を表わす語句が介詞の「在」によって導き出され、(14)(17)のように表現しなくてはならない。この種類の能動表現は上述の「③主体+①存在場所+②存在状態(V+着)」という文型の能動表現とは違っている。前者は「着」と共起することができないから、状態の描写はできないことになる。しかし、動的感覺は表現することができる(李臨定1985・1986参照)。それに対し、後者は能動表現として存在の場所も明確に表現することができるし、また、存在の状態も描写することができる。その構成は「③主体+②存在状態(V+在)+①存在場所」という構造である。「着」の有無による状態の描写の有無という点については、従来の研究ではあまり記述されていない。また、「在」の有無による帰着の強調の有無という点についてもあまり述べられていない<sup>9)</sup>。

房玉清(1992)では存在文(本研究の存在表現に相当)はAとBの二つの文型に置き換えることができると記述されている。Aは「名詞フレーズ+在+場所フレーズ」という文型、そして、Bは「名詞フレーズ+動詞+在+場所フレーズ+動詞フレーズ」という文型である。この二つの文型はいずれも人間や物の位置と状態を表わすが、しかし、A式は介詞としてある動作の持続の状態を表わすのに対し、B式はすでに形式化しており、いつも動詞に付着し、ある動作の停止の場所を表わすとしている(P 326-327)。このように、文中における位置によって、「在」はその意味が違ってくるのである。

日本語は、SOV(主語+目的語+述語)タイプの言語であり、「立つ」「座る」<sup>10)</sup>などの動詞は自動詞として文末に来ることになり、存在の場所を示す語と共起することができる。そして、主格助詞の「ガ」のかわりに、係助詞「ハ」が使われる場合は、説明的なニュアンスになり、存在主体がどこかに存在することを表現することができる。

中国語では「③主体+①存在場所+②存在状態(V+着)」という構造も、「③主体+②存在状態(V+在)+①存在場所」という構造も成立して、表現の多様性が保たれている。それに対し、日本語では「③主体+①存在場所+②存在状態(V+テイル)」という構造しか構成できないが、しかし、主格助詞から係助詞への置き換えも許容され、また、いずれの場合は、〈テイル〉と共起することができる。つまり、〈テイル〉はどの表現においてもその状態の持続を描写することができる。この点では中国語と大きく異なっていると言える。

日本語では、「存在場所(ニ)+主体(ガ)+V+テイル」という構造に用いる場合、「立つ」は、主体の動的状态を表わす動詞であるのに対し、「座る」は、主体の静的状態を表わす動詞である。ただ「立つ」は存在表現における動的状态を表わして、能動表現における動的状态とは違っている。この二種類の動詞はいずれも存在状態における動的状态と静的状態を表わすとい

う点では共通している。また、「出入口のところに学生が立たれている」「出入口のところに学生が座られている」のように、受動表現に用いることができないという点では、運動の結果を表わす受動表現に用いられる「掛ける」「書く」などの種類の動詞と違っている。しかし、「出入口のところに学生が立たされている」「出入口のところに学生が座らされている」のように、使役受動表現には用いることができるという点ではそれらと共通している。

### 3.2. 存在表現における動的状态

動作・行為を表わす動詞は、中国語には、「飛」「飄」「浮」「翱翔」「飛行」「盘旋」「游荡」「晃动」「活动」「閃」「烧」「流行」「流淌」「滚动」「走」「跑」「下」などがあり、一方、日本語には、「飛ぶ」「漂う」「浮かぶ」「旋回する」「ゆらゆら漂う」「揺れる」「活動する」「ひらめく」「焼く」「流行る」「流動する」「転がる」「歩く」「走る」「降る」などがある。これらの動詞は「飛」と「飛ぶ」、「飄」と「漂う」、「跑」と「走る」、「盘旋」と「旋回する」などのように、それぞれ意味的に対応する語として対照することができる。この種類の動詞は「存在場所+V+着+存在対象」という構造に用いられる場合は、主として動的状态を表わすことになるから、「着」はその静的状態の描写に用いられることになる。たとえば、

- (19) 天上飞着飞机。(空には飛行機が飛んでいる)
- (20) 空には飛行機が飛んでいる。
- (21) 外面下着雨。(外は雨が降っている)
- (22) ??下着雨。(「雨が降っている」の意)
- (23) \*外には雨が降っている。
- (24) 外は雨が降っている。
- (25) 雨が降っている。

中国語では、(19)(21)のように、「①存在場所+②存在状態(V+着)+③存在対象」という文型に用いられる場合、「飛(飛ぶ)」「下(降る)」などの動詞は、いずれも動的状态を表わす。「着」はその動的状态の持続の様子を描写していると考えられる。また、「飛(飛ぶ)」は、「飞机在空中飞着(飛行機が空を飛んでいる)」のように、前述の「③存在主体+①存在場所+②存在状態(V+着)」という文型に用いることもできるし、さらに、「飞机飞在空中(飛行機が空中を飛んでいる)」のように、「③存在主体+②存在状態(V+在)+①存在場所」という文型に用いることもできる。そして、「飞机飞着(飛行機が飛んでいる)」のように、存在の場所が明示されない「主語+V+着」という文型に用いることもできる。この三種類の文型のいずれにも用いることができるという点では、3.1.における「站(立つ)」「坐(座る)」などの動詞と大体共通している。しかし、「站(立つ)」「坐(座る)」などはこの三種類の能動表現の文型においては静的状

態を表わすのに対し、「飛(飛ぶ)」「下(降る)」などは、どの文型においても動的状態を表わすことになる。この点では二者は大きく異なっている。

そして、「飛(飛ぶ)」は「①存在場所+②存在状態(V+着)+③存在対象」という文型に用いられる場合、存在表現として、ある場所に動的状態が存在することを表わしている。(19)は空中という場所を飛行機が飛行しているという意味を表わし、客観的な存在としてその状態を表現している。一方、「飞机在空中飞着(飛行機が空を飛んでいる)」と「飞机飞在空中(飛行機が空を飛んでいる)」も客観的な存在を表わしているが、能動表現として何がどうなっているかという意味を表わすだけであって、ある場所における客観的な存在を表わすことができないという点では、存在表現の場合と異なっている。

「飞机在空中飞着(飛行機が空を飛んでいる)」は、何がどこでどうなっているかという表現であり、その状態が「着」によって描写されているが、「飞机飞在空中(飛行機が空を飛んでいる)」は何がどこに動的状態が存在するかということを表わしているだけであって、その動的状態は特には描写されていない。この二種類の能動表現は、場所というものをポイントとして表現しているというわけではない。それに対し、(19)の場合は、空という場所をポイントとして表現し、客観的な存在として認識し、発話者が支配することが不可能な動作・行為を表わしているわけである。対象物を空間範囲において客観的に捉えるという点では、能動表現の場合と違っている。

ところが、「下(降る)」は(21)では場所を表わす語句があるため、表現として適切である。(22)は場所を表わす語句が使われておらず、「下着雨(雨が降っている)」だけでは確かな意味のある表現ではないため、不適切だと考えられる。(21)は場所を明示しており、「下着雨(雨が降っている)」という動的状態が存在する背景が明示され、自然な表現と言える。しかし、場所を表わす語句がなくなると、その動的状態がどこで発生するかという背景が分からないため、表現形式としては不十分であり、情報伝達には用いることができない。また、「下着雨(雨が降っている)」という文節だけで用いることができないという点では、「飞机飞着(飛行機が飛んでいる)」「飞着飞机(飛行機が飛んでいる)」のように、場所を表わす語句には頼らない「飛(飛ぶ)」などの種類の動詞とは大きく違っている。「下着雨(雨が降っている)」は表現上、独立性が保たれておらず、そのままではまとまった表現を作ることができず、その動的状態を存在させる場所というものが必要なのである。これは「着」が場所を表わす語句によってその動的状態を描写することができることの証左であると考えられる。即ち、動詞の種類によって表現の成立は影響されるものと言える。

日本語では「飛行機が飛んでいる」という能動表現は、(20)のような存在表現も自然な表現として成立するという点では、中国語の「飛」などの種類の動詞と共通している。「飛ぶ」は自動詞として経路を表わす「ヲ」を取り、「飛行機が空を飛んでいる」のように表現することができるという点においても、「飛」と同じである。ただし、「飛」は「飞机飞在空中」のように場所を表わす語句を後に置く場合は、その場所を表わす語句によって制限されているので、「着」と共起することができなくなるのに対し、「飛ぶ」は場所を表わす語句をとっても、〈テイル〉と共起することができるため、その飛行の動的状態の持続を表現することができる。〈テイル〉は存在表現における動的状態の持続を描写することができる。この点では、中国語と日本語は大きく違っている。

一方、「降る」は(23)のように、場所を表わす語句を取れないという点では、「飛ぶ」と違っている。また、中国語の「下」とも違っている。「降る」は、完全に場所を表わす語句を取れないというわけではなく、「外では雨が降っている」「外は雨が降っている」のように、「外では」「外は」と共起することができる。しかし、「外には」とは共起することができない。「外には」は存在の場所を表わす語句として、存在を表わす動的状態や静的状態と共起しやすいが、しかし、自然な動的状態とは共起しにくい。「外では」「外は」は場所を表わす語句だが、存在の場所を表わす語句ではなく、「内では」「内は」とは反対な空間範囲を表わすことになるため、「雨が降っている」という表現と共起することができるのである。「外では雨が降っている」「外は雨が降っている」という場合は、反対な空間範囲を視野に入れて、空間範囲の視点は強調されている。そして、空間範囲の視点が強調されない場合は、「雨が降っている」のように、自然な表現として適格である。

日本語では、動作主や発話者による制御可能な動的状態を表わす場合は、「外では」「外は」などの場所を表わす語句に助けを借りることになるが、そうではない場合は、〈主語+述語(動詞)〉という構造で表現することができる。たとえば、「雨が降っている」という表現だが、部屋の中或いはホールの中ではなく、その反対側にある空間を背景に降雨しているという含意があるため、普通は空間範囲を表わす語句と共起することができない。つまり、「雨が降っている」という表現は、建物外部の自然現象として自明の理である。即ち、動作主や発話者による制御可能な動的状態ではなく、自然現象として起こっているはずの動作主や発話者による制御不可能な動的状態だということである。それで、「降っている」というだけでも、発話者と聞き手はいずれもその動的状態の持続の含意を理解することが可能である。

日本語では、動詞は独立性が保たれており、主格や

目的語を取らなくても、存在を表現することができる。動詞に独立性が持たれているほか、〈テイル〉が描写性を持っていることも、その表現を成立させる要因の一つだと考えられる。たとえば、「降っている」という表現の場合は、主格の「雨が」が省略されているが、〈テイル〉を用いた文によって降雨中の動的状態を描写することができる。この点では日本語の動詞には共通性があり、中国語の動詞とは大きく違っている。ただ存在の場所を表わす語句が現れない場合は、存在表現とは言えない。場所を表わす語句とは共起するものの、それには依存せず、単独で存在を表現することができるという点では中国語と大きく異なる点である。日本語では「飛ぶ」「降る」などの種類の動詞は、必須的な共起語句としての空間範囲を表わす語句と共起することを要求しないという点は、日本語の大きな特色と言えよう。存在表現の文型には拘らず、そのまま自然現象の状態を描写することができるという点は、日本語の文法的接辞である〈テイル〉が強い描写性を有しており、その文法的機能をよく働かせているものと裏付けることができる。

〈テイル〉は、「存在場所+主語+V+テイル」という文型に用いることができるという点では、中国語の「飛」「下」などと同じである。しかし、日本語では場所を表わす語句がなくても、〈テイル〉は「飛行機が飛んでいる」「雨が降っている」のように用いることができるから、存在表現には限らず、動的状態の描写にも用いることができると考えられる。ただし、動作主や発話者による制御不可能な動的状態を表わすことになると、動作主や発話者による制御可能な動的状態とは性質が違っているという点では、「飄(漂う)」「飛(飛ぶ)」「走(歩く)」「跑(走る)」などとほぼ同じである。

「雨が降っている」という表現の場合、中国語における「(外は)」という場所を表わす語句が必要だとされるが、日本語では「外には」は「外には雨が降っている」という表現になると、非常に不自然なものとなる。なぜかという点、「雨が降っている」という表現の場合もとより、「降っている」という表現だけでも、その動的状態が存在する空間が想定できるからである。「雨が降っている」「飛行機が飛んでいる」は自然で論理的な表現と思われるが、「外には」という場所を表わす語句が前に置かれると、言葉としての論理性が失われてくるので、不自然な感じを受けることになる。この点では場所を表わす語句が前置しないと、存在表現として落ち着かない中国語とは違っている点である。

#### 4. まとめ

中国語の「着」と日本語の〈テイル〉は、存在表現において、「站/立つ」「坐/座る」などの動詞に接続する場合は静的状態の持続、「飛/飛ぶ」「跑/走る」などの動

詞に接続する場合は動的状態の持続を描写することができるという点では大体共通している。しかし、両語は、存在場所を表わす語句が比較的自由に移動することが許容されるかどうか、また、移動された場合はその状態を描写することができるかどうかという点では大きく異なっている。

「着」は存在表現において、動的状態と静的状態のいずれも表現することができる。しかし、場所を表わす語句が文頭に来ていない場合は、その状態の持続を描写することができない。また、「下着雨」などといった動詞フレーズは、存在表現への依存度が高く、文法的には独立性に欠けている。この点では、〈テイル〉と違っている。

〈テイル〉は存在表現において、動的状態と静的状態の持続のいずれにも使用することができるが、存在表現の文型には依存することがなく、助詞の機能により、文中における位置の移動への許容度も高いため、典型的な存在表現のために束縛されることはあまりない。そして、文法上の独立性も認められ、空間範囲を表わす語句がなくても、文法的機能を果たすることができる。この点では「着」とは異なっている。

#### 注

- 1)、周知の通り、中国語は孤立語として語順によって文法的関係を表わす言語であるが、日本語は膠着語として助詞などによって文法的関係を表わす言語である。
- 2)、本研究では中国語の考察語は「く」、日本語の考察語は「く」で示す。例文に挙げられた考察語については下線を引く。以下同じ。
- 3)、ここに挙げた作例の共起の可否については、中国語は筆者の語感によるものであるが、日本語は日本人話者を実施したアンケート調査の結果によるものである。なお、参考のため、相関の作例に関するデータも取ったので、以下示しておく。参照されたい。
- 4)、考察語についての成果は多数あり、ここで一々取り上げる余裕がないので、本研究と関係のある文献だけを紹介する。また、参考文献として挙げられている論文も最小限にした。
- 5)、ここでは先行研究を振り返るため、ごく簡単に紹介する。関連の論文については具体的に考察する時に取り上げる。以下同じ。
- 6)、丸尾誠(2007)にも言及がない。また、氏は「他在墙上挂着一幅画(彼は壁に一枚絵を掛けている)」「他在书架上摆着很多书(彼は本棚に沢山本を並べている)」を非文としている。詳しくは氏の論文(同P 120)を参照されたい。
- 7)、中国語では日本語の「ニ」に相当する語句は介詞として分類されている。
- 8)、従来の研究における二つの「着」があるという説はこの2つの用法に基づくと考えられる。ただし、「着」の動的状態から静的状態への切り替えの持続もできるという用法を有機的に考えれば、「着」は二つではなく一つだという認識に至ると考えられる。
- 9)、「在+处所(「在」+場所(語))」の意味機能や語順による制

約については、俞咏梅(1999)が詳しい。参照されたい。

- 10)、工藤真由美(1982)では、「立つ」「座る」を变化の結果を表わす動詞、そして「飛ぶ」「走る」「歩く」を主体の動きを表わす動詞として分類されている。一方、仁田義雄(1982)では「立つ」「座る」を变化の動詞、そして「飛ぶ」「走る」などを運動の動詞として分類されている。両氏の分類は用語は異なるものの、内容はほぼ同じである。詳しくは両氏の論文を参照されたい。

◎ここに挙げた日本語の例文がセンテンスとして成立するかどうかについて、日本人話者(年齢18歳~20歳、いずれも国立大学の在学学生である)にアンケート調査を実施して判定していただいた。

調査の基準は以下の通りである。日本語として非常に自然だと思うものは(○)、やや不自然な感じがするものは、言わないことはないと思うものは(?)、日本語としては非常に不自然でほとんど言わないと思うものは(??)、日本人であれば、絶対誰も言わないと思うものは(×)と記入するように依頼した。以下それぞれその結果を示す。

- (1) 出入り口のところに学生が立っている。  
[回答者31人：○31人 ? 0人 ??0人 × 0人]
- (2) 出入り口のところに学生が立たれている。  
[回答者31人：○0人 ? 6人 ??9人 × 16人]
- (3) 出入り口のところに先生が立たれている。  
[回答者31人：○24人 ? 6人 ??0人 × 1人]
- (4) 出入り口のところに学生が立たされている。  
[回答者31人：○31人 ? 0人 ??0人 × 0人]
- (5) 出入り口のところに先生が立たされている。  
[回答者31人：○10人 ? 8人 ??10人 × 5人]
- (6) 演壇上に主席団のメンバーが座っている。  
[回答者31人：○28人 ? 2人 ??1人 × 0人]
- (7) 椅子に学生が座っている。  
[回答者31人：○30人 ? 1人 ??0人 × 0人]
- (8) 椅子に学生が座られている。  
[回答者31人：○0人 ? 7人 ??10人 × 14人]
- (9) 椅子に学生が座らされている。  
[回答者31人：○25人 ? 2人 ??3人 × 1人]
- (10) ベッドに一人の人が寝ている。  
[回答者80人：○47人 ? 29人 ??4人 × 0人]
- (11) 外は雨が降っている。  
[回答者80人：○72人 ? 8人 ??0人 × 0人]
- (12) 外には雨が降っている。  
[回答者80人：○7人 ? 26人 ??25人 × 22人]
- (13) 今、雨が降っている。  
[回答者80人：○78人 ? 2人 ??0人 × 0人]
- (14) 雨が降っているところだ。  
[回答者80人：○45人 ? 23人 ??9人 × 3人]
- (15) 外では雨が降っている。  
[回答者80人：○68人 ? 8人 ??3人 × 1人]
- (16) 雨が降ってある。

- [回答者31人：○0人 ? 0人 ??3人 × 28人]
- (17) 空には雲が浮かんでいる。  
[回答者80人：○78人 ? 1人 ??1人 × 0人]
- (18) 空は雲が浮かんでいる。  
[回答者80人：○16人 ? 26人 ??19人 × 19人]
- (19) 電燈の周りには虫が飛び回っている。  
[回答者80人：○75人 ? 4人 ??0人 × 1人]
- (20) 空には稲妻が閃いている。  
[回答者80人：○61人 ? 12人 ??3人 × 4人]
- (21) 空には稲妻が閃かされている。  
[回答者16人：○1人 ? 3人 ??5人 × 7人]
- (22) 空には稲妻を閃かせている。  
[回答者16人：○2人 ? 2人 ??4人 × 8人]
- (23) 空には稲妻が閃かしてある。  
[回答者16人：○0人 ? 1人 ??4人 × 11人]
- (24) 空には稲妻が閃かされている。  
[回答者16人：○0人 ? 2人 ??5人 × 9人]
- (25) 空には飛行機が旋回している。  
[回答者49人：○45人 ? 2人 ??2人 × 0人]
- (26) 空には飛行機が旋回してある。  
[回答者49人：○0人 ? 5人 ??15人 × 29人]
- (27) 空には飛行機が旋回されている。  
[回答者49人：○1人 ? 5人 ??14人 × 29人]
- (28) 空には飛行機が旋回されてある。  
[回答者49人：○0人 ? 4人 ??7人 × 38人]
- (29) 水面には何か漂っている。  
[回答者16人：○15人 ? 1人 ??0人 × 0人]
- (30) 庭には紙屑が舞い降りている。  
[回答者80人：○44人 ? 22人 ??8人 × 6人]
- (31) 足元には落ち葉が舞い降りている。  
[回答者80人：○26人 ? 21人 ??21人 × 12人]
- (32) 空には飛行機が飛んでいる。  
[回答者31人：○13人 ? 14人 ??4人 × 0人]
- (33) 飛行機が空を飛んでいる。  
[回答者31人：○29人 ? 2人 ??0人 × 0人]
- (34) 飛行機が空を飛んである。  
[回答者31人：○0人 ? 0人 ??3人 × 28人]
- (35) 川面に何か漂っている。  
[回答者49人：○49人 ? 0人 ??0人 × 0人]
- (36) 川面に何か漂ってある。  
[回答者49人：○0人 ? 6人 ??18人 × 25人]
- (37) 川面に何か漂われている。  
[回答者49人：○0人 ? 5人 ??9人 × 35人]
- (38) 空には雲が流れている。  
[回答者49人：○48人 ? 0人 ??0人 × 1人]
- (39) 空には雲が流れてある。  
[回答者49人：○0人 ? 8人 ??14人 × 27人]
- (40) 路上には一人の人が歩いている。  
[回答者80人：○48人 ? 25人 ??6人 × 1人]
- (41) 後ろには誰か歩いている。

- 〔回答者80人：○21人 ? 36人 ??18人 ×5人〕  
 (42)後ろに誰か歩いている。  
 〔回答者80人：○67人 ? 10人 ??2人 ×1人〕  
 (43)後ろにはトラックが走っている。  
 〔回答者16人：○13人 ? 1人 ??2人 ×0人〕  
 (44)後ろにトラックが走っている。  
 〔回答者16人：○12人 ? 3人 ??1人 ×0人〕  
 (45)路上にはトラックが走っている。  
 〔回答者49人：○49人 ? 0人 ??0人 ×0人〕  
 (46)路上にはトラックが走ってある。  
 〔回答者49人：○4人 ? 11人 ??17人 ×17人〕  
 (47)路上にはトラックが走られている。  
 〔回答者49人：○0人 ? 1人 ??9人 ×39人〕

- 寺村秀夫1982・2003『日本語のシンタクスと意味』Ⅱくろしお出版  
 中島孝幸1999「結果を表す構文について：テイルとラレテイル」『三重大学日本語学文学』10号  
 仁田義雄1982「動詞の意味と構文—テンス・アスペクトをめぐる—」『日本語学』1巻2号  
 原沢伊都夫2002「理論と実践の結びつき：テアルの表現形式から」『静岡大学留学生センター紀要』1号  
 藤井 正1976『動詞+ている』の意味』金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』(所収)むぎ書房  
 吉川武時1976「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』(所収)むぎ書房  
 吉川妙子2012『日本語動詞テアルのアスペクト』晃洋書房  
 李 京保2007「～テアル文の構造及び意味用法」『日本研究教育年報』11号東京外国語大学

## 参考文献

- 中国語  
 北京大学中文系1955・1957級語言班編1982《現代漢語虛詞例釋》商務印書館  
 陈 平1988「論現代漢語時間系統的三元結構」《中國語文》第六期  
 戴耀晶1994「現代漢語持續體“着”的語義分析」邵敬敏主編《九十年代的語法思考》商務印書館  
 戴耀晶1997《現代漢語時體系統研究》浙江教育出版社  
 房玉清1992《實用漢語語法》北京語言學院出版社  
 費春元1992「說“着”」《語文研究》第二期  
 金立鑫2004「“着”“了”“過”時體意義的對立及其句法條件」《第七屆國際漢語教學討論會論文選》北京大學出版社  
 李臨定1984《現代漢語句型》商務印書館  
 劉一之2001《北京話中的“着”(zhe)字新探》北京大學出版社  
 呂叔湘主編1984《現代漢語八百詞》商務印書館  
 石毓智2006「論漢語的進行體範疇」《漢語學習》第三期  
 王學群2007『中國語の“V着”に関する研究』白帝社  
 吳卸耀2006《現代漢語存現句》學林出版社  
 俞詠梅1999「論“在+處所”的語義功能和語序制約原則」《中國語文》第一期  
 徐 丹1992「漢語里的“在”與“着”(著)」《中國語文》第六期  
 張 黎2012《漢語意合語法研究—基於認知類型和語言邏輯的建構》白帝社

## 日本語

- 飯嶋美知子2004「結果継続表現の日中対照研究—「他動詞の受身+テイル」と中国語の存在文、受身文—」『早稲田大学日本語教育研究』4号  
 奥田靖雄1977「アスペクトの研究をめぐる—金田一的阶段—」『宮城教育大学国語国文』8  
 金田一春彦1950「国語動詞の分類」金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』(所収)むぎ書房  
 工藤真由美1982「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13巻4号  
 江田すみれ2013「『ている』『ていた』『ていない』のアスペクト」くろしお出版  
 斎藤 茂2012「現代日本語のテアル構文の研究内容の要旨」『言語と文明』10麗澤大学大学院言語教育研究科  
 杉村 泰1996「テアル構文の意味分析—その「意図性」の観点から—」『名古屋大学人文・社会研究』第25号

## 謝辞

本研究は2014年8月に中国人民大学(北京)で開催された第六回中日対照言語学シンポジウムの分科会において口頭発表した原稿をもとに加筆修正したものである。この場を借りて、当日会場内で司会の方をはじめ質問したり発言したりしてくださった方々に感謝の意を表する次第である。また、本研究の日本語の表現についてご指導を頂いた愛媛大学元教授で書道家である菊川國夫先生に厚くお礼を申し上げる。

(2015年9月18日受理)